新興VCの素顔 ～5～

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ

個人リスクで運用

ジャフコ出身 創業期に投資

村口　和孝代表

〈組合概要〉
▽所在地　東京都文京区
▽設立　1998年11月
▽投資担当者　3人
▽運営するファンド
　2本、計17億3000万円
▽投資実績
　延べ8社、
　計13億5000万円

ジャフコ出身の村口和孝氏が設立した日本テクノロジーベンチャーパートナーズは、投資事業有限責任組合法（九八年十一月施行）に基づくファンド第一号を設立した。運用する二本のファンド名には「独立」「個人」の英単語の頭文字から取った「i」をつけた。資金の出所も運用者もすべて個人という姿勢を表現している。

ハイテク企業を発掘

投資対象は先端技術分野で事業を興すベンチャー企業。原則、日本国内の案件で、創業期からカネと人を出す。月二万円の家賃で入居できるインキュベーション施設「iGATE」も提供している。

三億三千万円のi一号は五社に対する払い込みを終え、十四億円のi二号「勝海舟」もほぼ投資のめどがついた。ネットオークション専業のDeNA（ディー・エヌ・エー、東京・渋谷、南場智子社長）はその一社。出品者の身元や出品内容の確認を徹底して安全を前面に出したサービスを始めた。

このほかにも次世代ウェブ言語「XML」専門のソフト開発会社、インフォテリア（東京・品川、平野洋一郎社長）やコンピュータ関連など先端技術分野での大学との共同研究を事業化するアイアンドエフ（東京・文京、宮崎竜二社長）などに投資した。

いずれも独自性を強く打ち出した新しい事業形態で、「経営者は若く、情熱や誠実さが感じられる」（村口代表）という。すでに八社に投資。今年中に東京証券取引所のマザーズに上場できそうな企業も三―四社ある。

村口代表がジャフコにいたころは株式公開の敷居が今より高く、社歴の長い優良中堅企業を磨いて公開させる例が多かった。事業アイデアが新しく、生まれたての企業に投資するのは常識外れと受け止められた。しかし、村口代表は創業期の投資先企業を積極的に開拓して、利益をあげた。

米国で手法を学ぶ

大学は医学部を目指して二浪した後、経済学部に入学した。勉強よりシェイクスピアの芝居にのめり込んで一年留年したが、経済史を専攻して企業経営への関心が高まり、経営者を育てる職業に就こうと考えた。大学卒業間際の米国旅行で本場のベンチャー投資と出会い、ジャフコへの就職を決めた。

入社後の第一の転機もやはり米国旅行。九五年に、現地でネットスケープの株式公開に遭遇した。創業間もない赤字企業が株式を公開し、しかも市場は高株価で評価した。日本では考えられない現実に直面し、ベンチャー投資の奥深さを感じた。

九八年のイスラエル訪問では、ベンチャー企業の相次ぐ誕生と企業を育てるキャピタリストの台頭を目の当たりにした。「個人が自分自身でリスクをとって勝負している。企業に賭していては駄目だ」と感じた村口代表は帰国後すぐに辞表を提出した。

増えるエンジェル

組合設立の準備過程では、堀場製作所の堀場雅夫会長が個人として出資に応じてくれるなど日本でのエンジェル（個人投資家）の増加を肌で感じた。

ベンチャー投資ブームを背景に、ベンチャーキャピタリスト個人でファンドを運用する例が最近増え始めた。「後に続くベンチャーキャピタリストがが出てくるのはうれしい」と村口代表。日本でも個人がリードするベンチャー投資の土壌ができつつあるようだ。

（東育子）